

## 東宝殿解体修理

### 1.概要

東宝殿は本殿の東側に北側の斜面寄りに南面して建つ。御祭神は東に和尚権現、中央に賀茂明神、西に高良明神がまつられている。

建物の大きさは桁行三間（約 5.0m）、梁間一間（約 2.1m）に中央間を一間（約 2.0m 奥行 1.75m）突出し向拝とする。屋根は切妻造りで、銅板葺である。正面は蔀戸とし、出入口を西面に設け、他は板壁とする。

解体前、建築年代は不明で西宝殿と同時期とされていたが、今回の解体で木負より宝暦 6 年（1756）、縁束より宝暦 7 年（1757）の墨書が発見され、建築年代が確定され、西宝殿と同時期であることが確認できた。その後の判っている修理履歴は嘉永 3 年（1850）塗装『柞原八幡宮文書』、明治 10 年（1877）屋根葺替『旧宮大工家文書』、明治 21 年（1888）向拝柱・縁束・縁葛取替「縁葛墨書」、昭和 9 年（1934）修繕（木部・屋根・塗装）『柞原八幡宮文書』、昭和 34 年（1959）塗装『柞原八幡宮文書』、昭和 49 年（1974）屋根銅板葺『柞原八幡宮文書』



図 1 修理前南西面



図 2 床組破損状況

### 2.修理方針 【解体修理】

破損状況は建物全体に白蟻が入り、床組は腐朽が進行していた。経年による軒の垂下が見られた。破損が著しいため今回は（全）解体修理とした。

### 3.発見物

解体修理をしていると過去の修理の状況や昔の大工さんの仕事が分かってくる。東宝殿でも建物が建てられた年代や修理年代が判る墨書が発見された。



図 4 木負墨書  
「宝暦六丙子歳  
十二月十九日作之」



図 5 縁束墨書  
「宝暦七年  
丁丑正月廿二日  
古国府村」  
反対面には  
「利光平右衛門  
重昌（花押）」



図 3 柱破損状況



図 6 縁葛墨書  
「三佐新町  
山口民十郎  
明治二十一年」

